『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会） 第 11 巻 第 1 号 2008 年 7 月 75 頁～ 83 頁

花の駅・片品「花咲の湯」の住民出資と地域づくり

―金融の面からの考察―

上 西 英 治

A Case Study on Resident Investment on "Hanasaku no Yu" of Floral Station Katashina and Regional Development

― Consideration from Financial Aspect ―

Eiji JONISHI

Summary

In this study, I have considered from financial aspect regional development at Hanasaku area in Katashina, Gumma Prefecture and investments made by the residents to the state-run public corporation.

"Hanasaku no Yu" of Katashina Floral Station was established at Hanasaku area in Katashina in 1998 and all of the households in Hanasaku (250 households) area invested 3000 yen each on Katashina Center for Promotion Public Corporation administrating this facility. There are very few cases that all the households of a region invest on a public corporation administrating the regional facility. Mechanism of investment made by all the households was created amid regional development and gave similar effects on the region as establishment of pseudo cooperative society does. In addition, it should be remembered that presence of the community resident organization allowed investments made by all the households.

The case of Hanasaku area shows an example incorporating investment as a form of financial mechanisms to regional development and suggests that incorporation of financial methods is necessary for regional development. Investment appears to keep social relationship over the long time and may build up and keep enthusiasm for regional development.

Keywords
Resident investment, financial mechanism, investments made by all households, regional development

Ⅰ はじめに

群馬県片品村花咲地区における地域作りと公社への住民出資について、金融の面に重点をおいて考察する。

片品村花咲地区に花の駅・片品「花咲の湯」が 1998 年に設立され、この施設の運営会社㈱片品村振興公社に、花咲地区の全戸 (250 戸) が各々 3 千円の出資をした。地域の全戸が地域の施設を運営する公社に出資した事例はほとんどない。この事例の背景や意義について金融の面から考察するために、当時の花咲地区の地域づくりに深くかかわった関係者 2 人に、2007 年 6 月 1 日に聞き取り調査を行った。

聞き取り調査から、全戸出資の仕組みは地域づくりを行なう中で考え出されたこと、全戸出資により擬似的な協同組合を作ろうとしたこと、全戸出資を可能とした地域住民組織の存在があることが明らかになった。花咲地区の例は、地域づくりのなかに出資という金融の仕組みを取り入れた事例であり、地域づくりに金融的手法を取り入れる必要性を示唆している。

Ⅱ 花の駅・片品「花咲の湯」の概要

（1）片品村の概要

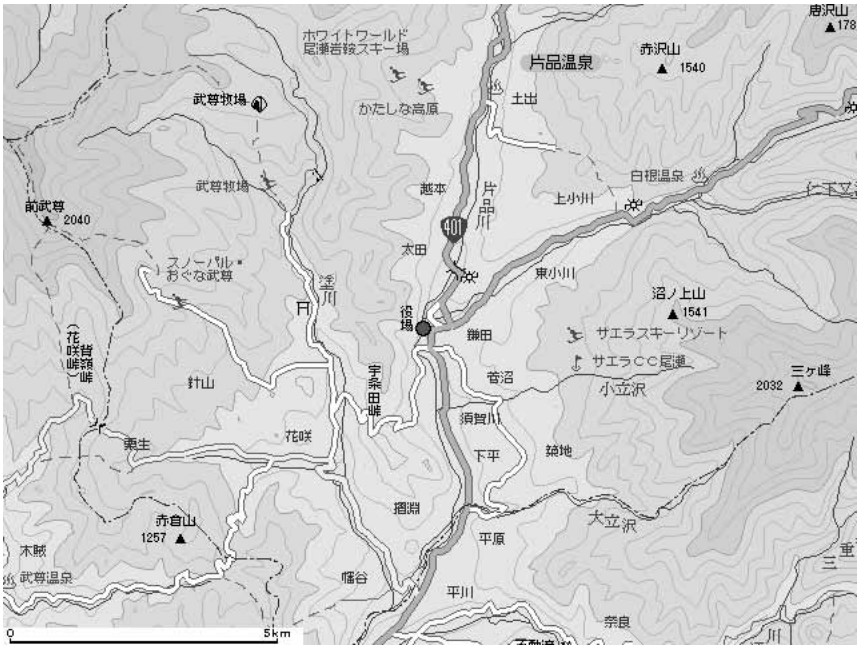
群馬県利根郡片品村は、群馬県の東北端に位置し、新潟・福島・栃木の各県に接する山村である。東西 24km、南北 34km、総面積 392.01km^2 であり、標高は最高 2,578m、最低 640m、森林が 90％を占めている。尾瀬をはじめ武尊 (ほたか) 山、白根山や、丸沼・菅沼などの自然環境が豊かである。スキー場が 7 ケ所あり、年間を通して訪れる観光客でにぎわっている。人口は、5,598 人 (うち男性　2,730 人、女性 2,868 人)、であり、1,753 世帯が暮らしている。(2007 年 11 月現在)

片品村の地域には、3 つの大きな谷があり、谷ごとに集落が発達し、結びつきも強い。この 3 つの谷を基準にして、1955 年より 8 区制がとられ、行政区域は、 1 区から 8 区に分かれている。

（2）片品村花咲地区 (3 区) の概要

花の駅・片品「花咲の湯」は、片品村花咲地区 (3 区) にある。花咲地区は、人口 891 人 (男性 449 人、女性 442 人) の集落であり、276 世帯が暮らしている (2007 年 11 月現在)[1]。さらに、花咲地区は、

図１　花の駅・片品「花咲の湯」付近図



Mapion 都道府県地図 http://www.mapion.co.jp より作成。

鍛治屋、栃久保 (とちくぼ)、登戸、山崎、栗生 (くりう)、針山 (はりやま) の 6 つの地区に分かれ、各々に集会場がある。花咲地区の産業は、トマト栽培を主とした農業と観光業であり、宿泊施設は 85 軒を数える[2]。

花咲地区の武尊 (ほたか) 神社では、1981 年に群馬県の指定重要無形民族文化財に指定された「猿追い祭」が、300 年以上続いている。猿追い祭りは武尊山を御神体とする武尊神社の祭りで、毎年旧暦九月の中の「申の日」に行われる。猿追い祭りの由来は、以下の通りである。武尊山麓の猿岩に猿がいて毎夜畑の作物を荒らした。村人は困りはてて相談し、その猿を神様にすることになった。その時、猿が出てきたので村人は猿を追いまわし、現在のような猿追い祭りとなったといわれている[3]。

群馬歴史民族研究会[4]によると、1977 年当時花咲地区には、鍛治屋 (かじや)44 戸、山崎 44 戸、登戸 47 戸、栃久保 (とちくぼ)29 戸、栗生 (くりう)20 戸、針山 14 戸、合わせて 6 つの集落、204 戸があった。この地域では星野姓が多く、星野姓を中心に戸丸、佐藤、藤井、高山、永井姓などが、「ジカタ」と呼ばれる同族集団を構成していた。「ジカタ」とは家と家の関係のことであり、その関係は永久に続くとされ、主に本分家関係で結ばれ、冠婚葬祭や猿追い祭りの祭祀に重要な役割を果たしている。猿追い祭りの氏子総代は、6 つの集落から 1 名ずつ選ばれた。このように、花咲地区では、昔から伝わる方法で猿追い祭りが、現在も続けられている。

（3）花の駅・片品「花咲の湯」の概要[5]

花の駅・片品「花咲の湯」は、1998 年にオープンした都市農村交流施設であり、ここで各種のイベントが開かれている。施設の延べ面積は 1,782 ㎡であり、片品村が総工費 8 億 7,000 万円を負担し建設された。片品村直営の観光施設であり、運営は㈱片品村振興公社が行なっている。年間の来客数は 17 万人でそのうち 93% は村外からの利用者である。年間の売上高は 2 億 2100 万円ほどである。K 支配人によると、2 億 1400 万円の村外外貨を稼いでいるという。従業員は 30 名であり、ほとんどが地元から採用である。

施設は、地下 1 階にギャラリー（著名な版画家）、大広間、温泉があり、1 階にはイベントホール、レストラン花咲（60 席）、おみやげコーナー、展望テラスがある。おみやげコーナーおよび駐車場では地元企業、農家が山菜、農山林品、農産加工品を直接販売している（販売手数料として売上の５～ 10％を当社が徴収）[6]。

㈱片品村振興公社は、1998 年 8 月 26 日設立された。主な業務は、温泉施設等管理運営である。資本金は 1,000 万円であり、花咲地区の住民 75 万円、JA 片品村 75 万円、片品村 850 万円が出資している。特に注目されるのは、花咲地区の全世帯 250 戸が各 3 千円を出資していることである。社長は村長であるが、実際の責任者は支配人である。

Ⅲ　全戸出資の㈱片品村振興公社

㈱片品村振興公社の資本金は 1,000 万円であり、このうち花咲地区の住民が 75 万円出資している。特に花咲地区の全世帯 250 戸が各々 3 千円を出資していることが注目される。金額は僅少であるが、全戸が出資することは珍しい。出資の背景を知るために、住民出資に深く関わった K 支配人と H 氏に対して、2007 年 6 月 2 日、直接聞き取り調査を行なった。

K 支配人は、1993 年林野庁より出向し、3 年間片品村役場にて企画を担当した。地域住民と 100 回以上会合を繰り返し、花咲の湯の基本計画策定に深くかかわった。片品村からの強い要望により、1998 年に前職を退職し、現在、花の駅「花咲の湯」の支配人となった[7]。

H 氏は、地元旅館の女性経営者であり、1994 年に教員を辞め家業を継いだ。片品村の景観審議委員、花咲むらづくり推進委員、県教育委員などを務めている。片品村振興公社への全戸出資をまとめた立役者である。

K 支配人と H 氏に、①㈱片品村振興公社に対して 3 区の全世帯 250 戸が、３千円を出資した背景と意義、②出資してから 10 年過ぎ、全戸出資は地域づくりに有効であったか、の 2 点を質問した。

（1）花の駅・片品「花咲の湯」の設立の背景

片品村は、1996 年度より第 2 次総合計画を策定し、花の谷構想により、自然と共生する村づくりを進めてきた。片品村の 8 区に対して、花苗等を村で購入し、各区へ配布し、各区では花の苗の植付けから除草、潅水、種取り等の作業を実施している。維持管理費用として、各区へ助成金を交付していた[8]。

片品村は、3 区の花咲地域に、道の駅をつくる計画を立てた。片品村は、大きく 3 つの谷の地域に分かれており、谷の仲間意識はとても強い。地域住民の間にも、花の園構想が広がり、集落の中心に、花をテーマとする地域住民が集まる施設を建設しようとする機運が高まった。このときの担当が、農林省から出向し片品村の村づくり課にいた K 支配人であった。

K 支配人によると、花の駅・片品「花咲の湯」の設立までの 3 年間に、3 区では村づくり推進委員会が月に 2 回、多いときには週に 2 回開かれた。こうして会合は 100 回以上に及んだ。18 時から 21 時まで 3 区の住民たち 30 名あまりが、夢を語り合った。

地道な会合を数多く開くうちに、住民の意見や希望が集約されていき、3 区の中心部に道の駅が設立されることになった。出資について話し合いを始めたのは、村づくり推進委員会が開かれてから 2 年後であった。全世帯が出資を了解するために、1 年間ほどかかった。出資金額の大小ではなく全世帯が出資することに意義あると、K 支配人は強調する。また、当初、出資金額は 1 万円を予定していたが、その後の話し合いにより 3 千円になった。

このような経緯を経て、1998 年に設立された片品村振興公社に、花咲地区の全世帯 250 戸が各 3 千円を出資することになったのである。片品村振興公社の資本金は、1,000 万円であり、片品村 850 万円、花咲地区の住民 75 万円、JA 片品村 75 万円が出資している。

（2）全戸出資の背景

全戸出資に深くかかわった H 氏に、全戸出資に至る経緯を詳しく聞いた。

花咲地区の全世帯に、一律 3 千円を出資する合意ができるまでに、1 年ほどかかった。この地区にある 6 つの集会所の常会に出席して、この地区の全世帯が同じ金額を公社に出資することが重要であると、全戸出資の意義を説いた。全戸一律出資にこだわったのは、全戸出資により花咲地区の住民各々が平等の権利意識を持つようになり、住民参加の意識が高まると考えたからである。

この地区の住民の中には、1 人暮らしの老人や、1 円たりとも出資したくない人もいたので、1 世帯当りの出資額を 1 万円から 3 千円に引き下げた。花咲地域の住民に理解してもらうのには手間と時間がかかった。地域づくりの中で、全戸出資は不可欠であるという確固たる信念があったからこそできたのであり、もう一度やれといわれてもやれる自信はない。よくぞみんなの意見がまとまったものだ。

全戸出資から 10 年過ぎた今でも地域住民の間には、出資したことが心に残り、地域の住民は子供を含めて花の駅・片品「花咲の湯」を誇りに感じている。

信金中央金庫 (2004) では、住民出資の意義を次のようにまとめている。住民出資型会社の設立目的は、住民の手による施設運営が成功の近道と考えたためである。住民は出資することによって施設をより身近なものとして受け止める。農家は山菜や農産品を当施設で積極的に販売しているほか、100 名程度はボランティアで施設内広場の植栽や除草、イベント手伝いなどを行っている。

Ⅳ　考察

片品村花咲地区の全世帯 250 戸が、㈱片品村振興公社に出資したことの意義は（1）全世帯が出資したこと、（2）全世帯が均等に出資したこと、（3）出資という形態をとったことであり、その背景として（4）住民出資を可能とした地域住民組織の存在が挙げられる。

（1）全世帯が出資

片品村花咲地区の全世帯 250 戸が、㈱片品村振興公社に出資したことの意義は、全世帯の均等出資により、地域住民の参加意識が強まったことである。住民の結束を強める手段として出資という金融取引が使われた。地域の全世帯が出資したことにより、㈱片品村振興公社の経営に対する地域住民の緩やかな牽制監視が働いたとも考えられる。また、全世帯出資を可能とした地域住民組織の存在も忘れてはならない。

（2）全世帯が均等に出資

花咲地区の全世帯が、公社に対して 3 千円を均等に出資したことの意義は、この出資により擬似的な協同組合が設立されたと看做すことができる。

「協同組合とは何かについての ICA 表明」によると、「協同組合とは、人々の自治的な協同組織であり、人々が共通の経済的・社会的・文化的なニーズと願いを実現するために自主的に手をつなぎ、時宜様態を協同で所有し、民主的な管理運営を行なうものである」と定義される。協同組合の原則として、自発的でオープンな組合員制度、組合員による民主的な運営、組合員は協同組合に対して公平に出資するとともに、組合の財産を民主的に管理、組合の自治・自立などが定められている[9]。このように、協同組合は、出資額にかかわらず 1 人 1 票の原則で、共同で所有され民主的に経営されることが求められている。

このような視点から今回の全世帯の出資を見ると、継続的に数多く開かれた地域住民の集会において自主的、民主的に議論が交わされ結果、全世帯が会費という形態ではなく出資することとなった。各戸が均等に出資したことにより、協同組合の 1 人 1 票の原則と同様に、 1 戸 1 票の原則に

より㈱片品村振興公社の民主的な運営が可能となったとも考えられる。一方、㈱片品村振興公社は株式会社であり、協同組合ではないという指摘もあろう。しかし、１戸１票の民主的な運営を目指していることから、擬似的な協同組合であるのは間違いない。この点からみると、地域住民が、自らの手で協同組合を作ったといえるのである。

また、地域づくりを進める中で、全戸出資により擬似的な信用組合を設立しようとする気運が高まり、１年間にわたる時間をかけて合意がなされている。全戸出資を目標として長期にわたり継続的に行なわれた集会という行為自体が、有効であったともいえるのである。

（３）出資は社会的関係を長期に保つ

片品村花咲地区の全世帯の１戸当たりの出資額は３千円であり、決して多い金額ではない。しかし、会費や寄付などの一時的な支出ではなく、出資という形態をとったことに意義がある。

会費や出資を金額面から比較すると１戸３千円であり違いはない。しかし、出費した人々の抱く思いは会費と出資では大きく異なる。会費はある一定の時間が過ぎると消滅する権利である。一方、出資は出資先が存続する限り持続する権利である。出資という金融取引は社会的関係を長期に保つ。たとえば、個人間で資金を貸借した場合、資金が完済されるまで借手と貸手間には、資金の貸借という社会的関係が維持されるのである。

出資という金融取引は、出資した地域住民と㈱片品村振興公社との関係を長期間にわたり固定化し、お互いの社会的関係を強化している。住民は出資することによって施設をより身近なものとして受け止め[10]、施設を誇りに思っている(H氏)。このように、全戸出資はお互いの社会的関係を強め、地域住民の参加意識が強めているのである。

（４）地域住民組織の存在

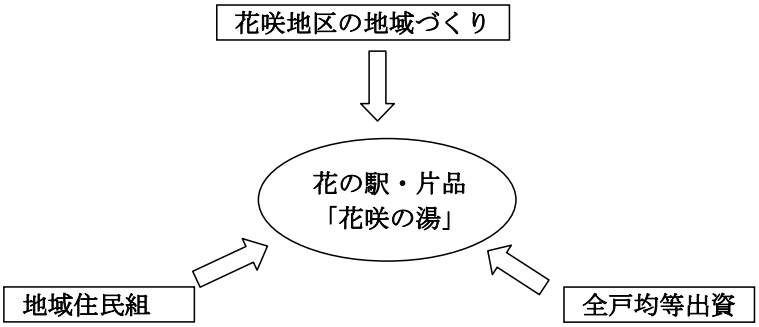
全戸出資した背景の一つに、谷ごとの地域の強い結びつきと祭礼を行なう地域の住民組織の存在が挙げられる。片品村には、３つの大きな谷があり、谷ごとに地域が区切られ、谷ごとに集落が発達し結びつきも強い。この３つの谷を基準にして区制が採られている。３区の花咲地区では、「ジカタ」と呼ばれる同族集団が構成され、猿追い祭りなどの伝統的な祭りが300年以上前から伝承され現在も行なわれている。

このように伝統的な祭りや祭礼を行なう地域住民組織が、地域に存在する意義は大きい。倉沢は、祭礼はソフトな歴史的遺産であり、伝統的祭礼はもともと神事を中核とした宗教的行事の付け祭りとして発足し、その付け祭り部分が多くの人々をひきつけて肥大化し、地域住民主体の大きな行事となったものであると指摘したうえで、祭礼はコミュニティの共同意識の核として地域社会を総合する機能を持つと意義付けている[11]。

花咲地区では、大きな社会構造の変化がなく、猿追い祭りなどの伝統的祭礼とそれを行なう地域住民組織が長い間存在していた。猿追い祭りはコミュニティの共同意識の核として存在し、花咲

地区の住民意識を結びつけるソフトなシンボルであり、コミュニティの精神的な基盤であった。このようなソフトなシンボルに加え、花の駅・片品「花咲の湯」が地域全体の想いを共有するハードなシンボルができ、そのハードなシンボルを強く結びつける仕組みが公社に対する全戸住民出資であった。

図 2.　花咲地区の地域作りのイメージ



（じょうにし　えいじ・高崎経済大学大学院地域政策研究科博士後期課程）

1　2007 年 11 月、片品役場に確認。
2　詳細は、ペンション 49 軒、民宿 22 軒、旅館 1 軒である。2007 年 11 月、ヤフー電話帳にて確認。
3　片品村観光協会公式サイト http://www.oze-info.com より。
4　群馬歴史民族研究会編「花咲区有文書目録、猿追い祭り調査報告」群馬歴史民族研究会　1980.　P90~128
5　ここでの記述は、信金中央金庫 総合研究所「地域調査情報 １５－４」2004.3.3　P19 と、木下支配人のヒアリングによる。
6　信金中央金庫 総合研究所「地域調査情報 １５－４」2004.3.3　P19。
7　07 年 5 月 6 日読売新聞より。
8　第 3 次片品村総合計画策定委員会『第 3 次片品村総合計画』片品村．2006
9　河野真践編 (2006)「協同組合入門」P51
10　信金中央金庫 総合研究所「地域調査情報 １５－４」2004.3.3　P19
11　倉沢進　21 世紀のコミュニティ．倉沢進編『コミュニティ論』2002.　174-183.　放送大学教育振興会